

ふじいでら歴史紀行

229



近鉄藤井寺駅は、私も毎日の通勤に使用している、親しみのある駅です。

駅の北側にはロータリーがありますが、その東側一帯に、今から1600年ほど昔に古墳が造られていたことを存じですか。現在は地上に姿をとどめていませんが、発掘調査で、5世紀中頃から後半にかけて造られた3基の古墳が見つかっており、「葛井寺の古墳群」と呼びます。

葛井寺1号墳は墳丘の直径10メートルの円墳、2号墳は墳丘の一辺5~5.5メートルの方墳、3号墳は墳丘の直径13メートルの円墳です。

葛井寺1号墳の発掘調査では、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪などとともに、滑石製の紡錘車が見つかっています。紡錘車とは、糸を紡ぐための道具で、コマのような形をしたおもり



▲葛井寺1号墳の滑石製紡錘車



▲殿町古墳の石製紡錘車



▲殿町古墳の土製紡錘車

の部分が見つかりました。中央に穴が開いており、そこに木の棒を差し込み、棒の先に植物の纖維を巻き付けて、回転させて糸を作る用途に使われたものです。古墳から見つかった紡錘車は、副葬品として用いられたと思われます。

ところで、葛井寺の古墳群と小山の古墳群、2つの古墳群から見つかった、紡錘車について考えてみたいと思います。

紡錘車とは、糸を紡ぐための道具であると先ほど説明しました。紡いた糸で布が織られましたが、この機織りの技術は縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけて、朝鮮半島から伝わったさまざまな技術の一つです。糸や布は、

紡錘車や機織りの技術を用いたとして人々にとって貴重な品物でした。このようないくつかの古墳を小さな古墳に副葬することは、そこには葬られた人物の身分の高さ、威信を示す意味があつたと考えられるのです。

(文化財保護課 新開 義夫)

横江古墳と西代1号墳は、それぞれ墳丘の直径30メートルと15・7メートルの円墳、西代2号墳と殿町古墳は、それぞれ一辺4・5メートルと10メートルの方墳です。

殿町古墳からは、円筒埴輪などとともに、石製と土製の紡錘車のおもりの部分が見つかっています。両方も表面には竹の管で押したような文様が付いています。これも葛井寺1号墳のものと同じく、古墳の副葬品として用いられたものと思われます。

